景観文化Q＆A　「景観形成エレメント」

TDA正会員　伊藤　登

Question：　防災施設の景観ってどうなるの？

Answer　東日本大震災からの復興検討において防潮堤の高さについてのニュースを聞くことがありますが、防災施設がつくりだす景観は、実は私たちの身の回わりにも数多く存在します。河川の堤防がその代表例です。その設計諸元は、最大の雨量が発生する確率をもとに求められた基本高水流量と、それに対応した計画高水位に基づいて定められます。この際に用いられる確率は、一般に30年〜100年に一度というものであることから、どうしても施設が巨大となってしまいます。

大河川では、高さ10メートルを超える堤防も珍しくありません。またこのような大河川に合流する小さな支川では、大河川からの逆流が起きることから、逆流区間では大河川と同じ高さの堤防が築造されることになります。小さなスケールにそぐわない巨大な堤防が景観として出現することになってしまいます。

防災施設は非常時対応の施設設計が基本であり、同じ公共施設でも道路や公園などと設計に対する考え方が大きく異なります。通常の施設であるならば、人々の日常的利用を考えた設計がなされるでしょうが、防災施設は100年に1回といった確率で起こる降雨などを対象とした設計がなされ、その規模設定の段階では人々の利用や景観についての考慮がなされることはほとんどありません。

しかし、河川の堤防などの防災施設においても、近年は景観についての考慮がなされる取組みがみられます。非常時対応施設の日常的な利用や景観に対するアプローチです。堤防の勾配を緩やかに変化させて、自然的な印象を高めるなどの工夫が一部の河川で行われています。今回の大震災においても国土交通省が「河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き」を示しました

防災施設だからといって諦めるのではなく、日常的な利用や景観に対する配慮に対する必要性と重要性についてあらためて考えてみることが、美しく快適な都市環境を形づくって行く上できわめて大切です。

県道と同一勾配で整備され、隣接公園との一体的利用が可能な磐井川緩傾斜堤防

景観ビジネス最前線

求む広告！

私たちは、このスペースを多くの企業の皆さんと共有し、美しく豊かな景観を創っていきたい。

NPO法人景観デザイン支援機構・意見広告

ホワイト・ボード

■まちなみスケッチ展

新年1月18日から23日までの6日間、大井町にある品川区民ギャラリーで、TDA主催による「まちなみスケッチ塾」参加者のスケッチ作品展示会が開催されます。

■TDA サロンの参加者募集

1月25日を皮切りに原則として毎月第4水曜日の夜に千駄ヶ谷の事務局で「TDAサロン」を開催します。興味深い話題提供者を推薦してください。

■景観ビジネス最前線の仲間募集

右上の枠内は優秀な景観関連企業を社会にアピールするためのスペースです。一応有料ですが、自薦他薦の情報をお待ちしています。

編集後記

総会も無事終わり役員も新しい陣営になりました。左欄の「ホワイト・ボード」は「事務局だより」のあった欄ですが、会員の自由な意見を掲載する場に提供することになりました。短めの情報になりますが、匿名か否かを問わず是非意見を事務局宛にお寄せ下さい。現在4年間続いた「景観講座」の編集を検討する一方で、新しい企画も始まっています。当紙の発行がやや遅れてしまったことをお詫びします。

TDA JAPAN　NPO法人 景観デザイン支援機構　事務局
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-28-8-304
Tel：080-6722-4114　Fax：03-6459-2221
E-mail：news@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp

［編集：㈱アーバンプランニングネットワーク］201112700

TDA JAPAN

TDA News Letter　Vol.15

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構　けいかん・きこう　http://www.tda-j.or.jp

2011-12-01

目次

□表　紙
赤坂プリンスホテル旧館
／（絵・文）安部 貞司
□見　開
TDA NEWS
第６期定例総会及び記念講演報告
／高橋 徹
□見　開
ランドスケープ事情
「《ハイライン》ー空中の都市公園ー」
／工藤 安代
□裏表紙
景観文化Q＆A
「景観形成エレメント」
／伊藤 登
□裏表紙
景観ビジネス最前線　／TDA
□裏表紙
ホワイト・ボード

赤坂プリンスホテル旧館（旧　李王家邸）

「赤プリ」の愛称で知られ、丹下健三氏の設計による赤坂プリンスホテルは個性的な超高層ビルとして東京の景観的象徴で新鮮でした（1983、昭和58年開業）。高く延びる高層建築群とお堀や森を貫く高速道路、そこに車が走る赤坂見附の景観はSF的な未来都市のようでした。しかし老巧化と競争力低下により再開発のために取り壊され、数年後にホテルを含む新たな超高層ビルとしてオープンすることになっています。しかし、日本を代表する現代建築の一つが30年で取り壊されるのは、あまりにも短過ぎる建築です。

社会的評価を受ける間もなく消滅される大量の近代建造物を後世に継承していくために、1996年に「登録文化財制度」ができました。歴史的価値から地域的価値の重要性への変化でもあります。それでも制度では「築50年を経過している建造物」となっています。一方、文化庁は来年度に丹下健三、黒川紀章など「名建築家の設計図保管資料館」を設置することになりました。ようやく日本でも近代建築を文化財として評価する機運が出てきました。

その本館の東側にある旧館は、開発計画でも残されることになっています。旧館は、韓国皇太子（併合後は皇族に準じる）の李王家の東京邸宅として建てられました（1930、昭和5年）。宮内省内匠寮の設計によるチューダー様式のデザインは白い壁と濃褐色の木材との対比が美しい建物で、1955年（昭和30年）に赤坂プリンスホテルとして開業しました（一時期参議院議長公邸として使用）。紀州藩邸の石垣や門は明治政府によって撤去されましたが、その跡に建てられた朝鮮王家の建物は東京都指定有形文化財に指定されました（平成23年）。前面の紀州藩邸に由来する達磨坂（譚訪坂）周辺は、国の史跡「江戸城外堀跡」の赤坂御門の石垣やお堀など、歴史的建物と由緒ある地域が、永い時間の中で歴史に根ざした成熟した景観・風景を創出しています。

TDA正会員　安部　貞司

TDA NEWS

第６期定例総会及び記念講演報告

TDA代表　高橋 徹

NPO法人景観デザイン支援機構（以下TDA）の第6期定例総会が10月22日(土)に開催されました。併せて記念講演が開かれ、今回は東日本大震災を踏まえて、「景観・防災・再生」の全体テーマの下、アプル総合計画事務所代表・芝浦工業大学教授／中野恒明氏、小沢設計計画室代表・宮城大学教授／小澤尚氏から講演を頂きました。

この11月から、第6期が実質的にスタートしますが、新理事会において新しい代表理事として高橋徹、副代表理事として杉山朗子、八木健一が選任されました。今後とも皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

第６期定例総会報告

日　時：平成23年10月22日(土)
会　場：コトブキDIセンター 2階
DIスタジオ

■第５期事業報告

機関紙「景観文化」を4回発行、「景観講座」を前期後半から引き続き「持続する街の景観」のテーマで開催した。都内に加えて、「鶴岡」、「彦根」、「静岡」、「松本」の地方都市を対象に、計6回、約120名の参加者を得た。松本については、現地開催して地元関係者との交流と懇親を図った。まちなみスケッチ塾を12回開催、参加者計65名。新規企画として「TDAサロン」を10回開催。「日本橋界隈のまち歩き」を開催。2件の委託業務を受けた。その他、ホームページの改良等を行った。

■第６期事業計画

第6、7期役員が決定した。理事は計12名。再任は8名（高橋、内山、杉山、小林、井上、藤波、吉田）、新任は4名（粕谷正則、長濱龍一郎、宮沢功、八木健一）。監事は再任（高見）、新任（栗原裕）の2名。入会金については、1万円を5千円に減額することにした。

第6期事業計画は、実行体制や各事業の内容の詳細について新役員による検討を進める。基本的には、これまでの諸事業を継続するが、景観講座記録の出版など、TDAのこれまでの活動の成果を集約させて対外的に周知・広報することと、今後の新たな進路を探ることに重点をおく。

1 記念講演 「浦安地域での液状化被害と対策、都市再生の事例」

中野 恒明 氏
アプル総合計画事務所代表／
芝浦工業大学教授

今般の東日本大震災では東京周辺でも震度5クラスの強い揺れに見舞われ、湾岸地区など軟弱地盤での液状化被害が多数発生した。講師である中野氏も浦安市在住で液状化被害に遭われた。都市デザイナーが自ら被災され、専門家としてその経験と今後の対応という貴重なテーマを語っていただいた。

被災して、先ず調べたことは自宅の傾きを調べたこと。大規模半壊という状態であったが、幸い自ら設計した家で構造的にもしっかりした基礎であったことから、耐圧盤工法による沈下修正工事を率先しておこなった。このことから、隣近の大半、数十軒から相談を受けることになった。家屋の調査や対策のアドバイスをボランティアで行い、日経アーキテクチュアにも紹介されることになった。

氏によれば、液状化の被災をあまり悲観していない。基礎がしっかりしている場合は、ジャッキアップでレベル調整は十分出来る。但し、一般住宅では基礎が弱い場合は問題が残る。液状化地域は、基礎にクラックが入っていなければ、レベル調整によって十分住める。考え方によっては、軟弱地盤は免震構造の地盤ともいえ、逆にメリットもあるというユニークな発想も披露された。

また、氏がこれまで行ってきた都市の再生例として、門司港、横浜のアーバンデザイン、東京での街並ガイドライン、コンペで選ばれ市民参加で進める新潟駅駅舎計画、旭川市での撤退した百貨店ビルのコンバージョン計画、タコ足状の市庁舎を建替え方式ではなく、既存施設を回廊でつないで再生を図る東御市でのプロジェクトなどが紹介された。

2 記念講演 「水と緑で囲まれた防災都市づくり・環濠都市」

小澤 尚 氏
小沢設計計画室代表／
宮城大学教授

講師は、長年、空間デザインの立場から都市の事業構想やアイディアを提案されてきた。その手法は、巧みなスケッチ、絵コンテでまちづくりの時間、歴史を物語にして語ることである。自ら住む日本橋での高速道路の地下化と運河再生による街の活性化提案は、その後の社会的議論のきっかけを作り、最近のアムステルダムの整備計画にも影響を与えたといわれる。3月11日の震災後、氏は海外の被災地見学を行った。ハリケーン・カトリーナに遭ったニューオリンズは表通りや観光地は一見、復旧されているように見えるが、裏通りは6年たっても放置されている場所が多く、実際の復旧には長くかかる事を示している。また、ドイツでは中止された原子力発電所事業地の跡地を改造した複合型遊園地がある。旧原発施設も利用されており、メッセージ効果の高い展示がされていた。

今回、氏の主張は災害に強い「環濠都市」の提案である。江戸の街づくりは、オランダのアムステルダムのそれと類似している。同じ人口高密地域であるが、高潮を考えて建物は5、6階建てにしてロの字街区につくり、高いところに避難することが出来る。水の管理は重要視され、ミニチュアランドをつくり、日常的に家族連れなど市民に見せている。一方、日本の水辺の街はどうあったらよいのか。津波を考えて高台に住めばよいというが、東北には住める高台は少なく、産業や生活は成り立ちにくい。高台ではなく、逆に土地に堀を造って、その土を盛った宅地を造り、水は集中させずに分散させるまちづくりは出来ないかと考えた。水と緑に囲まれた安全な低地をつくる、潮力やゴミ発電など自立型都市のあり方や仕組みをまちづくりの歴史に学びながら組込む。東北の復旧復興の問題もあるが、今や東京の問題解決も急がれている。

（以下、曽根幸一氏のコーディネートにより、二人の講師と会場で質疑が行われた。）

Q 浦安では地盤改良していれば被害は防げたのか？

A 今回は、していても難しかったと思う。

Q 高台移転をしても、その後低地に戻ってしまう。三陸の特殊な状況はあるのか？

A 近代化の過程で、働く場所は住むところになった。漁師は高収入を求めて浜に出た。地震があれば、舟で沖に逃げるのが基本で漁民は港の近くにしか住まない。高台に住まわせる計画を根付かせるのは難しい。また、古老がいた集落は上手く逃れたが、犠牲者が多い集落は新住民が多かったようだ。

Q 現地では、高台ではなく斜面住宅をつくる習慣はあるのか？研究する必要性は？港を引き込んで斜面住宅に近接させる案はどうか？

A 今は、プレハブなど普通の住宅を想定しているようだ。しかし、階段状住宅など、建築的に造り込むことも必要と思っている。しかし、日本の斜面地は一般的に地盤が弱く、雨も多いのでイタリアの街並ようにはいかないと思うが。

Q 樹林地が引き水を和らげる効果が判った。今後、落葉樹を使って再生エネルギーにも活用する総合的な発想が必要では？

A 元々、わが国では信玄堤に見られるように自然と馴染んだ工法があったが、近代になって一つの構造物で守る発想になってしまった。石川幹子さんたちも樹林による防災を研究している。

ランドスケープ事情

ニューヨーク　非営利市民団体によるまちづくりとアートの役割
≪ハイライン（High Line）≫－空中の都市公園－

TDA正会員　工藤 安代

リチャード・ガルピン作 'viewing station'　2010年5月－2011年5月
覗き込むと背景の都市景観が抽象的な図柄と重なり合い不思議な風景をつくり出す。

サラ・ジー作 ‘still life with landscape ’　2011年6月－2012年6月
作品の小箱は小鳥や虫、蝶などのための水飲場にもなる。

ニューヨーク、ダウンタウン・ウエスト地区にできた『ハイライン』は、都市や建築関係者の間ではすでに周知の都市再生プロジェクトだろう。高架貨物鉄道の跡地を利活用したH9m、W1.6kmにわたる細長い＜空中公園＞だ。オープンするや「The Village Voice」で"ベスト・ニュー・パブリック・スペース"に選ばれ、今ではマンハッタンの新たな観光名所となっている。周辺の不動産開発も急速に進み、高級コンドミニアムやホテル、ブティックやレストランなどの開店が相続く。

もともとこの周辺は、食肉加工卸売業区域で人気のないエリアだった。アメリカの高度経済成長期であった1920年代にこの高架鉄道は建設され、次第にトラック輸送にその役割を譲った50年代以後、陽の当たらない線路下は犯罪の温床として荒廃が深刻化していった。地域再生のため2000年までにクリアランスする計画だったところを、たった2人の市民の手によって存続を訴える運動が開始された。これが後に強力なロビー活動をはじめる「Friends of the High Line」の結成につながり、寄付金集めのパーティーや政治家、セレブを支援者として引き入れ、公園計画を実現していった。

アメリカ的ともいえるこのグラスルーツ活動のサクセスストーリーを持つハイラインだが、ロケーションとしても文化的なユニークさを持っている。今や200軒以上ともいわれる現代アートギャラリーのメッカであるチェルシー地区の真ん中を横断し、アート界を牽引しているアート・ディストリクトに位置している。アートが主産業でもある地区ゆえに、ハイラインでもユニークなアートプログラムが展開されているのだ。公園デザインは、ボストンのICAを設計したディラー・スコフィディオ＋レンフロ、都市デザイナー/ランドスケープアーキテクトでハイラインでの成功により今や全米で影響力を持つジェームス・コーナーが手掛けた。そして彼らの創造性に呼応するように、ビデオアートやパフォーマンス、ビルボードを使った作品など、多様な表現のアートが定期的に企画されている。周辺のアーバンスケープとの"対話"をするアートを選定しているという。

ハイラインには100種類以上の草花や低木が植えられている。旧高架線の上の視界から得られるマンハッタンの風景は予想以上に素晴らしい。

ホイットニー美術館がこの土地を購入し、2015年には新美術館がオープンする。現在、既存建築を撤去中。

一例をあげると、今年6月の3日間、ハイライン最南端の周辺ビル屋根で10名のダンサーがパフォーマンスを行った。ハイラインと同じ高さに位置するビルの上に点々と立ち、静かに踊るダンサーたちの姿は、都市空間を幻想的な劇場空間へと変容させたという。また、昨年から今年の夏まで1年間、ニューヨーク中の鐘の音（教会の鐘や証券取引所のベル、自転車のベルなど日常にある鐘の音）がそれぞれ1分間流れるという作品もあった。

今年の秋に第2区画が一般開放され、空中公園の散策路は2倍に延びた。ホイットニー美術館もこハイラインの脇に移転し、2015年にオープンの予定だ。現代アートで有名であったソーホー地区の商業化・高級化と同様に、危険な匂いの残っていたハイライン一帯もこれからさらにレトロな産業遺産の雰囲気と流行の先端が混在するファッショナブルなエリアに変貌し続けるだろう。市民の手による環境づくりと不動産開発者や行政などの思惑が多層に重なり合いながら、第2のソーホーとなるのか、または新たな社会活動の場になるのか、アーティストの創造的な力がその行く末を決めるのかもしれない。